



3 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6



井蛙抄第三

因山文庫

弘道文庫

佐山
重致

代は家近不度幾らゆ故や多は洞ともも
あるひち優羨なまよとすより或も羨むのこ
くをとすよりあまた洞の向きよハあはねと
毛附けきやひよしよとてうめくれたり是る
而はとの後もあ生手んせいろ洞と名すて書む
ちて名きともはやくそのいもれとすにまつた
佛乃制戒あも通局とあり法胄乃律も經言
誠あるうのみありとばとさけへど、ひつて

あやまちりゆきとよそ先達乃のすゝめられり
盤鷲そのへら代へ用接脣見のをよふり
うれとちる次見の子とよくう思とく
もくさあきとまもりかとまくは一筆

一なり

中務の親王文彦ニ而首拂手

しもあがつまへつけらるる不々立つての骨
民ア入道敷云是ハモヤれ難モトイシ
事ゆよ上ひあられハアのまなづる事すのあ

きなりしゆゆのよ御くへあられといすのむ
あとのよれ別よあるやうよも神も、
ゆ元又ぬけりとヤヒシと又茅四弓もはづき
あえ源ノヤ

六百番三合 拙野

有家朝后

いもれ花也^{アサカ}よ立あらめすとこそあられよ
判云なすめますとこそとひすか^{クヨウ}の拙野の母へ
となりしもへあらめくとひそんとうひなするを
うれとどくさなすめハ猪^{アヒ}ニ度^{スル}矣^ムトヤ

日平合

あらぬ御所

あまの茶事ともかくぬあめがちのたまうれ喜の際
判云何よれ承とをけふ宣ひまつてゆるがこの
きみかとえ向乃をまわらへゆる未耳心をゆり
定あ辭心のゆくに雪乃暖わらくよらつて
ゆくよきゆくゆくゆく

四位上人勅を百首

意承御所

もれりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
度后承平合茶添月 あらぬ御所

六面平合 寄遊宴

定承御所

心かよすきすれのきみよむててうづりあひ思つ
判云左平合トウのよつてとくへふ舟れあひに
来しるやうよきこねく

同平合 茶膳

左ね

女房

心ぬせまで思ひのこわなみより昔にあじよれたもの

大

卷之二

思ひあしたまうあらぬにゆきそゆるのれもせあをかの
判云あゆあま去^{あま}晴たましにかすまとひ右
さまのうれとくふすくふひやわよ
きぢよゆく

中務少卿王文憲二首

書く事もあればたぬきはおれのゆう乃むを
民アマ入道象云是しも次よヤトヒトキニ

同治通志

三
十
九
年
正
月
己
未
朔
己
未
望
己
未
既
望
己
未
晦

時眼源兼抄云中野猿石後成女建長元年よ

やうありとて 乾あつへきよ さもくらひす
うまいかむかうて まくはり けり やすとれ
おんきる神あせとて 故実ともす 人びと

一中にすすむとすとゆる
まきせんへよひゆふまつゆやうよやゆり
かくえのせよはげくかねんもゆ

漢語とて不可お詠事もし

六百番手合拈體

左

隆信鈴居

霜林の聲曲乃くいとみぬ人や拈れきうひくさん
判云ちが心洞のくわくとううや但ほひ御が

あ

千五百番秋合ノリ

左勝

女房

ゆるるすこねぢよをうてねうめくよまきゆり
又案云左がすくさん乃くらによつるがくと氣けい
こゑひからくやうよくうゆき

同音合

三官

ひがよくひのとくほ山海はあひ勢をそ
京極と判云ふの爲詞よつてくゆふ不
六百番手合云賭射

右 桃

家隆

梓うちもる事無事よりはうすて帝にたるるの爲人
判云左復舊儀くゆなきノトナリ又爲之
あともかくとくひあるふとれく御儀とあめ
ナシノトナリ亦おもやゝへまくや

田位上人勅進百首 定家

あまうる所より寄れすまほと喜びうる波のよ

中務親王

きくよる我みをなりすも金を取あまり紫
民部の入道教云是と又上句うちとけてやひん
私云誰不地難かしくむすびせざりけ

一尺やド之乃ゆく

中務親王

支かきぬねの山もすてトウ里の山乃ニ山へ也の里
民部の浦山毛乃里次あく一升平詠より
已又極ドレヒニ隨乎加割此作

一主翁

回向すよ

波がくらむれの風船であるに爲どろく船を駆る
民のまろきとく御元又やうかひさ

順徳院御一百首

物とめてもつりお舟にハ携ゆくしてよ白きけの浮舟
京橋ハ橋アリて渡るゝわたりくとすすみのと
御来い近幸もろきとく御あゆゆかきこ
トトよばへらひとま生初まめ人首仰あす

あまうりよ滿耳（あらそよ）て眞都（まんと）の思ひい

八雲浦抄云宦家もろきあくまきあく
爲ゆくなるもそのこゆくとも汨乃もろく
ちあくへと小きのまはづくひぢり
私云ちあくへとくまほんまきハ乘そあけり
すれ夷（えぞ）やか神よてけれと河内もろきよ
てはゆくはくは優ゆくはばよて人とくふ
ぬよゑくらむるもくへとく浦御製（みやざき）乃とれのと
一主翁お坂の笑ます御親王れ初名まろ

嘉隆は重井よりうき巻乃しけり。是あく
はけめてうのはまやひよんまれほとあく
まれあるよやみよは製の巻を。うきまの
あけやのむ猪乃あざこ向後てある事も会ふ
えゆわす不すての店ありけりとくがくら
よされ。此字緊て薄陰者歟。

千又百番平合

丸

頭眼

散ぬるをとあるとみかづ風す金弓。喜かる時

左うち風すへろ。さきの暖やひへふ下りよ
うくそゆるめき。
秀能すくめれ又首よ まこと

天は風初毫もうかくにわとりする鶴のまめれを

正治二年九月院沾平合曉雪

明ゆるう梢われすとねのうくすりうき若れのと
二字の秀包詳れまくわざれま

中勢親王正治云

雲はかるど成山きのをそ揚ぐるがくもあらむれ

民アハ入道云姿詞物重ひ但山鳥尾と有作
緒惟トニシ

同上詠云

山毛れ木ノテの様よかアノモアキヨ風林の月夜
山毛れ木ノテの様よカアヤヒリモスアツム根
ハクアソブケル

一木小

六百番平合

李詩

尤

キレタスミシマニシヌ森々森々也よすもく
判云左手乃キアキミテキヤアリノ日
セウハサマレツジサキウドウタクシホのひと
不吉者矣アリヤ

同上合右

顯昭

ニ此世ノ心アメト思テハナキアメソシテぬまモル賜
アキアヤ云左手乃キアキミテキヤアリノ日
セウハサマレツジサキウドウタクシホのひと
不吉者矣アリメ

同上合

萬葉歌

散ばゆる花とゆきと里すむ風とをなす風聲の山と
立あやまちと思す小石波教
判云方の思すよみよも立方ヤ林原千鶴丸

あら信義灘河寺合

是引ひ出けあれど思まに指よつてりく
判云立あ猪子はくわゆめやくせんとせ
但此すまかといふこととてうへてくとまか
きとねねよそくわゆめやうのすれ
人うづくわゆめやうのすれと一男思

はくはくとよりせよ

あきらま

きわゆきりふ
名譽内府

おく房谷北松生の約おきふひくわきくほすせや
多移董門朝曙をセ文さよ詠はせゆのうけの
因もとよみひ真正くまのほきわけゆひば羽
羽二字よ詠くあれ字書かく内セ字ハハキア
成ゆへきくくいじほのまとふまよ付事事

不車心思

一あはうや

西行浦裳灑手合古

ひらりりまきはれをまか年とてはるぬち
判云下す智心ありかむして凡も但凡せりや
とゆとく我も人をよみまかがりり
ありのうむけす。今もとまほひつまよ
けじひのうみ手乃をあくじめへ

長苦高

まほひのう

系猶黄門ば泊自他降也不仰あすい等

順徳院序 風首

花モシナリモ多有ねよあてゆくうづのし
鳥花え様岡錦繡え山川よあくはく毛
うれいき煙毛根え幽起思市酒うらひ毛

附多平首 月照綱承

定家

松林袖風れりやせをひくめうとあう布引の庵

植大納言やか三十首 補編

あはせてどある泊の松風ともうかうようく又

大納言やか三十首 補編

あは

とひきよみのゆゑが在り。はやくわらう。酒うね
肉裏鱈十五首平呑 うなぎ

おまかせの民のあま案とまくわらもく用の頃の初聞
歌後撰

はす一宣為

け取れか里の桂て。めに世を樂む事。のむりと見
六百萬うへて。のし破 さよか
白鳥の下のゆきの雪の月の夜と。とけの水
おもゆて。我とあく。夕暮をかうれ。分形と食うる

文治百首

そむす。春の花と秋の葉のうち。あらうと舗
けゆきを

長崎西府清平之内

東路黄門東緒降古今平洋院主翁勧ひ

一絶やねまう

僻葉抄云。絶やねまう。とけあらばやかと
見。やまう。はあくと。よもじく。と。まくんを
思ふ。やまう。と。み。それ。は。よ。お。わ。の。こ。ま。ゆ
ぬ。ま。め。か。な。れ。と。お。く。と。お。お。わ。と。お。ま。ゆ

せとすくのうづびおまのひよしへうすとそ
むす

一歌ちて

傳あまおまむむらくとけむつてとまきくは
ばゆりのんあはくとんけるやちゆう
わりくゑと後接するまくわ今乃世れすに
よしとすくいすくいすくめ徒

而はあ

宝治西首時中納言の御内と彼方々を之は

あくべりだる事のうのせ画とアリけりて

丁跡取くゆを注付くま

一わくと乗

千五百番平合

左大丸

阿ももて山かくふくえあらが花乃序りあくと
月

右

内大丸

足ひくとじとまけと足の山うひあるあくとしが
た花のうけあらあくと月の月漱よみあお

八事御用もあつて來しゆゑをかねり。以新色
とつづり書き。次事は内情の件也。

一
か
け

顯

はるかにそぞらの風をも花乃情のあら
久奈判云たゞけ乃祖もトセなきておもと
ひい神の氣をあわせや

六百卷
六百卷

有家朝臣

萬里也と約定の日が近づくと、今より更に其の事も

判云ああ方乃くのゆるすひとよふ優がうよ
仰そり但左中み字詠うひとよば優則か生と云
トはさすてゆくねうや

玉葉集十六

ち大物である氏

六本り老ぬる年せうりてあらわしけぬあま

一もとも

麻達

ゆのきの見る神をあらういわくにゆく宿多差

京洛黄門判云のあらふあらふゆりふを
か花乃色旁中廉まうおもくまつまおやの
うあらしてひとうりゆすやまきく竹と
かます

歌法院御百首

林鶴やる事あるにましれん花候うらはまめれ茶
官城野乃事の千草れ花たるやうれのうも
え又義筆ひうとの詞れ玉立之御おなむ

讀拾遺

五本

すがよしと高の初也もうつす被さる宿をうけり
貞應二年

あゆ

すがよしと高の初也もうつす被さる宿をうけり
一月元とそのれとよすめ

あら宿也と置川市今

お底じとおりひきよせぬか音也の奥へ歸ふ
判えたるまじづくとまづのまを是又ある
くわらへとすじゆはのれともひづく

魚たよはゆふるをもおほはばこのゆ
うづみがき

一八雲流抄云々とひもとひのとゆにあ
きありとひしてそのあはやくあられなむ
事くとゆまよおや一ぱくとテよはあらゆえ
うじくわか一あはくわくがけたおゆつふと云
ふゆかわかかわらわゆりつれむかくはいひ
うじくわくうれうれゆくわくはいひ
アハクわくかわゆヌトベキカハシマヒ

トのもとうへ物のまひーからぬよひーも
おひいぬお抱持へよものよそみけのめりと
重はいもぬほきせすやうきよなもと
のぶゆらつてくとくとくとくとくとくとく
ううううううううううううううううう
うふとめんめんめんめんめんめんめん
ひなまくえくくくくくくくくくくくく
まきはあくねくねくねくねくねくねく
ストのよがりのまつ明の月とひもとひもとひもと

吹きとくへるめーかぬあらひむけ乃き寺
よきのこむする也後頼およびをかくねとたま
泡乃やよわきかわくわくわくわくわくわく
かくはまくふらもとくわせんせんせんせん
かくはまくふらもとくわせんせんせんせん

千五百番 保季朝也
出づにねとくあるある四よあれよりおれタ事のさ
ゑね黄門判三里あわせくわくわくわくわくわく

五のと柳

西行法要灌頂三言

山河乃かの墨けとましの御のまひよたるむ雲
左手に持てゆめりとアラマリテ持てゆめ
きりあを乃まのまよまーりテ持てゆめ
ゆめりくよ

アラマリテ持てゆめ

中務の親王文無三百首アリ

春雨のあいづか風つめどり柳すまうり也
も又あくハ柳武人乃風くゆめり事廢

三、ふる島班覃うてゆ毛文ヤリシミ

萬代物うるを登下りてゆく野上の方は春をまめり
才四句不優作歌

サケテのあらひすら乃まがれあはれまつてと書され
より不優也

かとねくと青詞あとせも落葉を生花めぐねの夕色
ば因井も跡落くするや能事は是非い

ぬちて誰とすみかしの鶴のひの上に夜う門も
素すく風しとあらわのまは星の夜う門

已上二首はよしむ

えひうち乃やう月をめぬかよこれかを笑ひらる
山のあやまかすりや
いぬかぬやもひつゝ月とこ風とくわく
あの月岩とくわく風とくわくとせたすかな高き
しき乃へお塙平のかせよするかにあけてせとゆき
已上二首はよしむ

ひもうとある山風とくわくとそ風とくわくとを極まる
者とすくはる葉とわが葉とわが葉とわが葉と大りの葉

已上二首はよしむてよしむ

古川の水洗のとまれりとれ山もとて一そ波す成ぬき
是又愚心達くとる分明に悟る所遇
ふく波山もとて音の响きと葉が下るに葉がえうか
はゆすがゆす大葉金の手ひし

以上

文集由大吉書付并云

育樹あよやくあよやもあよわきまが園山の、谷門入水
京極黄門みかあら山谷を、瀬、あ所、既不

彦葉い

中勢の歌をきくよ。

あのめぐる野をみりておまのまとおはなせ
民ア云あくまくアノ日歌友アノモホ

野見

佐山
重致

新編文庫

